

宮本先生と「関わる」ということ

鶴岡 賀雄

宮本久雄先生の二度目の定年退職を機に、「パトリス・ティカ」に「簡単なエッセイ」を、というお誘いがあり、有り難くお引受けしたのだが、宮本先生について何か書くということの難しさに（お引受けのメールを出した時点で予感していたのだが）、あらためてたじろいでいる。なぜ、難しいのか。

一つには、宮本先生と私とのいわゆる社会的関係がよくわからない、ということがある。ある方との「関わり」の社会的な枠組がはつきりしていれば、まずはその枠組に相応しいやり方で、その方について何かを思い、「(型どおりの言葉を連ねる)」といった意味ではまったくなく）語る事ができるだろう。けれど、宮本先生と私の関わりは、どうもそのような枠にあまり即して、「はまって」いないような気がしている。だから、いわばどのようなスタンスと距

離感で、宮本先生についての言葉を呈したらよいか、心許ないのだ、と思われる。

私は宮本先生より七年ほど年少のようだが、宮本先生の授業に出たことはないので、「学生と先生」という関係ではない。カトリック信者ではないので、教会内での関係もない。ともに学んだ「友人」でももちろんないし、同じ大学の文学部出身ではあるが、先生は哲学科であり私は宗教学科というところに所属していたので、研究室の「先輩後輩」の関係でもない。その後、私は「本郷」と呼ばれるキャンパスにある私の出身学科の教員を務めることになったが、先生は「駒場」と呼ばれるキャンパスの教員であられて、学部を異にするので、「同僚」という関わりでもなかった。では、いくつかの研究会や学会で知遇を得ている研究者間の関係に留まるかということ、少なくとも私の側からは決してそうではない。

それでも、人間関係を表すことの多い日本語の敬称としては、私にとって「宮本先生」と呼ぶのがいちばん自然であり、他の呼び方——たとえば「宮本さん」——はできない。この「〱先生」は、学校の教員が互いにそう呼び合ういささか奇妙な風習に従っているという意味に留まらない。

人間のいわば「格」の違い、落差の認識から自ずと出てくる敬称である。

私が宮本先生のご面識を得ることになったのがいつ頃で、どのような機縁によることだったのか、よく覚えていない（近年ますます記憶が薄いのである）。以前から私のことを覚えていてくださった谷隆一郎先生のご仲介だったかもしれない。私の授業に出てくれた宮本先生の学生——いまは立派な研究者になられている——が仲介役になってくれたような気がする。いずれにせよ、とてもありがたいことであった。その後、宮本先生を中心とするいくつかの研究会や講演会などに連ならせていただき、おかげで私の公私にわたる交流の範囲はたいへんに広がった。さまざまなかと知り合うことができ、優秀な若い研究者たちとも楽しく交わることができている。私の研究室に所属する学生も何人か宮本先生のもとで本格的な研究の手ほどきをしていただき、これはいまも続いている。これは私にとってだけでなく、彼女・彼らにとつてこの上ない幸いであるにちがいない——。

以上で、私と宮本先生の「社会的」な枠に応じた関わり
の記述はほぼ尽きている。そして冒頭来、述べてきたこと

は、このようなことを書いても、私にとつての宮本先生のこと、私との関わりにおける宮本先生を何も書いていない、と思われてしまうことである。とすれば問題は、「関わり」ということをどう捉えるかなのだろう。だがこれは大問題だ。まさに宮本先生の学問と実践の核心に関わる。

宮本先生に、文字どおり『関わる』ということ——聖書の眼差し——という小さな本がある（一九九七年、新世社）。ずいぶん前に頂戴したはずだが、その時はあまり丁寧に読んでおらず、このほど読み直したいへんに感銘を受けた。ドミニコ会の修道院での一週間の黙想会の講話をまとめたものらしく、口語体の優しい語り口で聖書のいくつかの箇所が豊かに鮮やかに解説され、敷衍されて、その中で宮本先生——ここでは「神父」と呼ぶべきか——の最も大切にされている「人と人の関わり」という事柄の意味が説き明かされていく。講話の内容については触れることはできないが、聖書の教えの精髓が、まさに宮本先生にしかできないだろう仕方、勁くたくしなやかな線で見事に語られている。

そして私は、そこに宮本先生のいわば「肉声を聞く」思いがする。「文字を読む」だけではなく、先生の「声を聞く」思いがする。本や論文を読むとき、その著者を知っていると、その人の肉声で文字が読まれてくることは誰にもあるだろう。この講話は、口語体で、それも宮本先生⇨神父の語り口をそのまま保存するようにして——（爆笑ではなく微笑を誘う）先生らしい冗談を交えて——記されているだけに、その効果が大きい。だが、この効果は何なのだろうか。

その著者を知らなくても、文字として書かれたテキストから聞こえてくる声はある。その、ある意味で普遍的な声こそが、テキストのいのち（「文字を生かす霊」）だと考えることもできよう。が、いま言いたいことはそれではない。

またこれは、著者のいわゆる「文体」（文の身体性）の問題に収まるものではない。（宮本先生の書かれるものの文体——いわゆる宮本節——については、また別に語ってよいテーマだろうがここでは触れない。）著者を「個人的に知っている」ことは、ある著述家の文体を味わい、そこに単なる意味の水準以上のさまざまな効果を感じ得ることとは関係がない。むしろ著者との知遇は、その文体の生む効果を減殺

することもあるように思う。

では、著者当人の肉声が聞こえることは、テキストを読むときに何を付け加えるのだろうか。それは、著者と読者の「個人的な関わり」の水準が、テキストを読むとき、そこに書かれている意味を考えるときに、少なからず喚起され作動してしまうことだろうか。

宮本先生のじつさいの語り口は、いつも、動ずることなく穏やかで、優しく、決して早口にならず、僅かの含差を感じさせつつ、しかしきっぱりと落ち着いている。声は上品に甘く、聞く者の耳に心地よく染みいる。宮本先生自身の身心から発してくるその音声が、テキストを読むときも何らか聞こえてくる、ということとは、読む者の身心もまた、それに応じて、ある「関わり」の水準で震わされ、振り動かされることだろう。その経験は、たしかにじつさいに宮本先生と個人的に関わることを得た者だけが得られる特権に違いない。この個人的関わりの水準の作動は、上記のとおり、当のテキストの本質的な理解に資するところがあるとは思われない。そうした次元とは無縁であることが、書かれたテキストの本来であろう。「書かれた」テキストのも

つ普遍的可能性、つまり、すべての人に読まれ(うる)ことによつてテキストが開く無限の可能性——どのようによつても読まれうるし、さまざまに読まれることで無限に広がり生きていくテキストのいのち——を、上述のように著者の「肉声」は或る偶然的個人関係の方向に引き戻し限定することでもありうる。だからこそ、逆に、この個人的な関わりレベルが私にあることの「ありがたさ」が言いようもないものとなる。「関わる」とは、一挙に「すべての人」と関わるような普遍性とは無縁な水準で生ずることとして、まずは捉えられなければならないだろう。「すべての人と関わる(ひいては愛する)」ということとは、当然のことだが、眼前に偶々出会われる個人、一つの固有の身体と声をもつた一人の人と、夫々の状況に限定された関わりに入ることであろう。上記の講話のタイトルは、つまり根本テーマは「関わるということ」だった。講話は、有名な良きサマリヤ人の例話の敷衍的解釈に究極している。そこでの「良きサマリヤ人」と「傷ついたユダヤ人」との「関わり」の深層を掘り下げること、人と人が「関わる」とはどういうことかを説き尽くしている。「誰が隣人になったか」という問いに答えるなかで、「誰」という具体的身心を持った個

人の水準が決定的に立ち上がってくる。

こうして、「関わり」を説く著者の肉声を何らか聞きながら、その著者との個人的関わりが作動する中で、「関わり」について説かれるテキストを読むことができるということ、これがおそらく私と宮本先生との関わりにおいて最も貴重なことであるように思われる。「関わり」とは何かを考えることではなく、それは「関わり」自体である。

このように書いていこううちに、だんだん宮本「先生」ではなく、宮本「さん」と呼びたくなってきた。日本語のきわめて豊かな「敬称」系は、名指す相手との間に想定される関わりの微妙で豊かな、広義の人称性を——DuとSieの違いといった単純な二分法よりはるかに多様で繊細な人称性を——言語的に可視化していると思うが、「先生」が「さん」に変わろうとする傾動を示すとき——もちろん日本語の「さん」はあらゆるニュアンスを持ちうる——、それは私が宮本「さん」とたんに「より親しくなった」とを意味するものではない。私と宮本「さん」との「関わり」の質に或る変化を来しつつあることを示唆しているかに思われる。この変化を大切にしていきたい。